

失われた村落・小湾の言語調査：編集記にかえて

中本，正智

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

174

(終了ページ / End Page)

175

(発行年 / Year)

1991-03-25

失われた村落・小湾の言語調査

—— 編集記にかえて ——

中 本 正 智

ことばと社会は一体である。ことばを失ったとき、その社会は崩壊し、社会を失ったとき、ことばも消えうせる。小湾は沖縄戦の昭和20年まで、浦添にあった農業中心の村落であった。この沖縄戦で村落全体が破壊され、村落のあった地域は、戦後、飛行場として軍用地に接収され、完全にその姿を失った。

ふるさとを想うということは、たとえあばらやであったとしても、生まれた家を想い、子供のとき遊んだ浜や野原、そして山河を想うことである。してみると、小湾で生まれた人びとにとって、ふるさとを想う一片のかけらさえも持ちあわせていないということになる。

小湾の人びとは、ふるさとを失うことになったが、団結力があり、幸いにして、ふるさとから、そう遠くない小高い丘へまとまって移動することができた。ふるさとの場所は移ったが、村落社会を失うことがなかったのである。いうまでもなく、現在でも小湾として一社会の機能を維持している。

一社会の機能が保たれたとはいえ、そのことばも、しだいに変化していくのが道理である。そして新しい土地で育った世代には、ふるさとの土地の記憶はない。

ふるさとを知る人びとは、自分たちの世代で、ふるさとへの記憶を断絶させるのは惜しいと考えた。小湾という一社会を、言語ばかりでなく、文化一般からながめた全体像を記述して置く企画がたてられた。

言語では、野原三義教授、加治工真市教授、名嘉真三成助教授、それに私を加えて調査委員を構成し、それぞれ調査項目を分担して、辞典作成の企画をたてている。

『小湾方言辞典』編集の基準は、次のようである。

- (1) 失われた村落、小湾のありとあらゆる方言を採集して辞典にまとめる。
- (2) 辞典の形式は、項目を音配列とし、共通語引き索引をつける。
- (3) 内容は辞典の本文のほか、言語概観として、音韻、アクセント、文法、語彙について記述する。

- (4) 項目の採集と記述は、次のように行う。
- a. 各人が項目を分担して採集し、記述する。
 - b. 項目は、言語単位の最小から最大までかかげる。つまり、接頭辞、接尾辞などの接辞をはじめ、単語、複合語、熟語、成句など、すべてを項目にかかげる。
 - c. 項目には、できるだけ頻出する例文をかかげる。それには、ふつうに生活の中で表出されている短文、慣用句やきまり文句など、また、諺・琉歌など、ほかに、文化的背景として民俗・社会・生活とのかかわりが明らかになるように工夫する。
- (5) 項目記述は次のようにする。
- a. 項目の方言はカタカナで表記する。
 - b. カタカナの次に簡略音声記号を併記する。
 - c. アクセントは、対立特徴があるときだけに表記する。
 - d. 項目についての文法記述を、品詞（単語のとき）・複合語・慣用句などのように進める。
 - e. 用例については、意味特徴ごとに具体的な用例をあげる。
 - f. 慣用句やきまり文句についても、その用法と場面性などをできるだけ詳しく記述する。